

馬場孤蝶

明治時代の

閨秀作家

明治時代の閨秀作家

上

明治文壇への女作家の出現は大凡何時いつ分であつたらうか、手許には今何等の書類もないのだから、何とも云いようはないのだが、無論男の作家の出現よりは少し遅いことは確であつて、何うしても二十二年位から後のことだとは云つてよかろうと思われる。

年代は勿論確ではないが、木村あけぼの曙女史などが早い方

ではなかつたらうか。此の人は木村莊太、同莊五、同莊八君などの姉さんのように聞いて居る。尾崎紅葉君の門下ではなかつたらうかと思うのだが、何ういう作物があつたのか、今一向に記憶がない。唯読売新聞などでその人に関する消息を読んだことだけは、臆気ながら覚えて居る。此の人は若くして死んだらしい。莊五君などは覚えて居らぬようだ。

その次ぎには、田辺花圃かほ女史即ち今の三宅龍子君の名を聞いた。同君の『藪の鶯』が坪内大人の推薦的序文つきではっしゅう発售されたのは、これもはつきり何時だかは記憶

に止まって居らぬが、二十四年頃でもあつたらうかと思ふ。

その次ぎには、小金井きみ子、若松賤子しずこ——前者は故鷗外大人の令妹で、医学博士小金井良精氏の夫人、後者は、当時基督教会の名士で教育家であつた巖本善治氏の夫人——の両君ぐらいな順にならうかと思ふけれども、世間では此の両君に就ては、明治二十八年秋の文芸倶楽部の『閨秀小説号』なるものが出るまでは、余り多くは知らなかつたらうと思ふ。両君のものは大抵翻訳物であつたように思ふ。何か創作があつたかも知れぬが、僕な

どの記憶には止まっていない。前者の筆になったものは『しがらみ草紙』に現われ、後者のものは『女学雑誌』に現われたと思う。

田沢いなふね稲舟女史の名を吾々が聞いたのは何時頃であったろうか。大抵明治二十六七年頃であろう。山田美妙齋氏に結婚しないうちに既に幾分の名声はあったのではなからうかと思う。前記の『閨秀小説号』であったと思うのだが、稲舟女史の『白薔薇』とか何とかいう作が出ていた。今はその梗概さえ記憶しないが、唯そのなかに、男が女に対して麻醉剤を用いる条下があったので、女作家

としては、可なり大胆なことを書いたものだといふので、当時の人々の噂に上ったことだけは記憶している。けれども、小説そのものは、当時の標準から見ても、余り芸術的に完備したものではなかつたように覚えて居る。無論そんなにくわしい写実的なものでもなかつた。

稲舟女史はもうその時は、美妙氏とは別れて居つたのではなからうかと思う。此の人は、秋田か何処かのお医者さんの娘さんであつたといふ話であつた。自殺したのは、その『白薔薇』とか何とかいう小説が出てから間もなくであつたらうと思う。

当時の世評では、美妙が稲舟女史との別れ方が無情であつたといふのであつて、これが為めに、美妙の人気はすっかり落ちてしまった。大橋乙羽の話では、美妙齋のもの載せると承知しないぞといつたような脅迫状が博文館あたりへは盛んに舞い込んだので、雑誌へ美妙氏のものを載せるわけにいかかつたといふのであつた。

当時の『早稲田文学』には——ほかの雑誌も無論そうであつたが——美妙の不徳なるものを大に攻撃した短評のようなものが出た。平田禿木がそれに対して、「わけ知りの坪内さんもいらつしやることだし、そうまで美妙

をやっつけなくてもよかろうじやないか」というようなことを『文学界』の月評欄へ書いたところが、早速翌月号で、「文学界のやつ等はけしからんことをいう。ああいう不徳が見のがせるか。あれを何とも思わぬようでは、文学界派の者どもの道念の存在が疑わしい」といった意味のお叱りを蒙むって、一同大に閉口した。

それから少しあとになってからだと思うのだが、川上眉山君から、山田氏のおっかささんというのは、なかなか行儀作法のことなどのやかましい人で、山田氏の朝寝などにも小言をいうのだそうだという話を聞いた。山田氏

と田沢女史との絶縁は實際已むを得なかつたのである
う。

僕等は事情を——唯世間話で聞いただけで——直接何
も知らなかつたので、何もいえなかつただけであつたの
だ。

北田薄氷女史うすらいの作も前記の『閨秀小説号』に出て居つ
たと思う。此の人は日本橋の弁護士北田正董氏の娘さん
で、紅葉門下であつたと聞いて居つた。後に画家梶田半
古氏に嫁したのも、紅葉氏などの媒酌ではなかつたかと
思う。

大塚楠緒子——文学博士大塚保治夫人——の作も何か『閨秀小説号』に出て居ったろうかと思う。此の人は明治女学校へ通つて、透谷、藤村、秋骨などの人々の講義を聞いたのではないかと思う。

北田女史は余り作を遺さずに夭折したけれども、大塚女史の方は割合にあとまで生きて居ったためもあるのだらうが、可なりな量の作品を遺して居ると思う。大塚女史の逝いたのは、或は大正へ入ってからではなかつたらうか。明治四十一年の頃、一度夏目漱石君のところの新年会で見かけたことがある。

『閨秀小説号』では、若松賤子女史の『小公子』が大分評判であつた。小金井女史のものも可なり長い翻訳ものであつたように思う。

中

以上、まことに取り留めもない話で、こんなことなら、今日多念たんねんに当時の新聞、雑誌などを調べられる人々の方が、よっぽど確なことを書かれることと思ふのだが、僕としてはこんなこと位しきや知らないのだから、しか

たがない。

樋口一葉女史以外の古い女作家のことで、僕の今端的に思い出せるものはこんなものであるのだが、一葉女史のことになれば、可なり詳細に書き得る。それは、女史はなかなかくわしい日記を遺して居るのだから、女史のこと——殊に作家となつてからのこと——を書くには、あの日記を抜き書きさえすればいいからなのだ。

此頃の何処かの雑誌に『文学人国記』というようなものが出て居って、それには樋口一葉は甲州の人だと書いてあった。けれども、樋口女史は明治五年に麴町区山下

町で生れたのみならず、一度も甲州へは行つたことがなかつたろうと思われる。

樋口女史の父母は甲州の塩山えんざんから一里程山の方へ入つた大藤村おおふじの人であつたが、侍になる積りで夫婦一緒に安政年間に江戸へ出て、お父さんの方は旗本菊池家、お母さんの方は同じく稲葉家へ奉公して、間もなく与力の株を買つて、八丁堀衆に加わり、幕臣となり、維新後東京府の役人となつて、前記の山下町の官舎に居て、其所で一葉女史が生れたのだと聞いて居る。だから、斎藤緑雨が全集の巻頭に序したように一葉女史は東京の人なりと

云う方が宜しかろうと思う。昔は三代住まわなければ江戸ツ子ではないと云ったそうなんだが、東京になってからは、二代位で東京ツ子でよかろうではないか。

第一、『人国記』などと云つて、唯生れた場所ばかりで、同じ日本の人間を一樣に分類することが何の意味があるのだろうか、現に僕などは土佐人ということになって居るのだが、土佐で生れたには相違ないにしても、土佐を出たのは十歳の時で、東京の生活の方は何うしても四十年以上になる。その四十年の方へは何等の考慮も払ってくれずに、十歳までしきや暮らして居らなかつた

土地の方ばかりを重い関係に見られるのは、ヘンなものであると思う。そういう例は外にも幾らもある。戸川秋骨君なども肥後人となって居るのだが、これは、父祖からして定府で、唯維新後一寸藩地へ引き払って、其所で秋骨君が生れ、その後直に東京へ定住してしまったのだから、殆ど東京人と云っていい位である。

さて、話を戻して、一葉女史のことをいうことにするが、女史は若い時分に父を失い、兄を失って、戸主になつた。それは女史の十八の時であるというのだ。教育と
いうのは、それまでに、小学校——池の端仲町ぶんかい文海小学

校——揚げ出しの筋向う位の池に面したところにあった私立小学校であつたと思う——を先ず卒業したと云つて宜しいのであろう。

日記に拠ると、明治十九年八月に、小石川安藤坂の歌人中島歌子の門に入った。だから、一葉女史の教育は国文教育を受けたと云つていいのである。今全集に入つてゐる女史の日記は、二十四年の四月十一日から始まつてゐる。そうすると、それは一葉女史の二十歳の時であるのだが、それにしては、雅語の駆使などいかにも自由で、可なりに馴れた文体である。教育の具合も無論ちがいは

するが、今の二十歳位な女の人などにあれだけの文章——雅文——の書ける人は全く絶無であろう。当時でも何うであつたらうか。兎に角所謂真の才媛であつたにちがいない。

それまでに、一葉女史は文化、文政からしての徳川期の和かい文学、当時の新聞、単行本などで小説というよきな読書は可なりやって居たのである。

生活の為めという意味もあり、また学問的の仕事に就くという意味もあつたであろうが、一葉女史はその時分から小説を書き習いはじめようと思ひ立った。野々宮き

く子という友達が、半井桃水氏を知って居って、紹介してくれましたので、一葉女史が四月十五日に始めて、桃水氏を芝南佐久間町の寓居に訪問して、入門したことは、日記にくわしく書いてある。その時は、女史は書いて持つて行った小説一回分を批評を請うため置いて来た。

同じ月の二十一日のところには、桃水氏に見て貰らうために、前の小説の続稿を五回書いたとある。此の小説は今全集のなかに収められて居る題のない小説らしいのである。二十二日には、その小説を持って半井氏のところへ行つたところが、半井氏から左の如く云われたとい

うのだ——

「先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるが上に、余り和文めかしき所多かり、今少し俗調にと教え給う」

一葉女史の筆になれるものは、始の方のもの、即ち『おつごもり』——二十七年十一月頃の作——以前のものは、小説でも随筆でも皆此の和文めかしきところ即ち雅文調が勝って居ることは人の知るところである。殊に、『暁月夜』、『五月雨』、『経机』というような作は、著しく雅文脈のものである。日記でさえ、二十七年位まで

のところは、雅文調が強くなって居るように思う。

四月二十五日には、桃水氏から小説のことで相談があるから、表神保町の俵屋という下宿屋へ来てくれという手紙が来たので、一葉女史は二十六日の午前に、震災前まで南明倶楽部のあったところの裏あたりの下宿屋に桃水氏を訪問した。日記に拾集館とあるのは、南明倶楽部になる前の勧工場である。後にその勧工場は焼けて、その跡へ南明倶楽部が建ったのだと思う。

五月十二日に桃水氏は麴町区平河町へ転居したので、一葉女史は翌十三日に桃水氏を訪うて居る。

そういう風にして、半井氏との交際が親密になって、二十五年の二月四日には、雪の日に半井氏を平河町に訪うて、長く談話した。明治二十六年の一月頃になって書いた『雪の日』——『文学界』所載——はその時の気分を材にして書いたものらしく思われる。

同じ月の十三、十四日のところには、一葉女史が小説を書いたことが出て居る。これは多分、女史の作ではじめて活版になった『闇桜』のことであろう。

三月七日には、一葉女史は半井氏を訪問して、半井氏等の同人雑誌『武蔵野』創刊の前景気の話などを聞いて

いる。このあたりの記述の調子は今から見ると、如何にも古風で、当時の文学者——謂わば旧派の人々——の口調などがよく出ていて、甚だ面白いと思う。

一葉女史の日記の二十四、五年のところには、図書館へ通ったことが度々出ている。その時分は上野より外に公開の図書館はなかった。一葉女史は図書館へ通って勉強していた。図書館へ女はめったに行かない時分であった。

三月二十八日にも小説を書いている。これは半井氏の紹介で、当時あった『改進黨新聞』というのへ出そうとい

うのであったらしい。これは『玉だすき』で、浅香のぬま子という名で出たものだそうだ。

六月頃になると、半井氏との交際に関し、知人間で飛んでもない噂が始まったので、中島氏とも相談の上で、一葉女史は桃水氏との交際を断ってしまった。此の時分には、半井氏が左の如く云つて――

「君が小説のことよ。さまざまに案じもしつるが、到底絵入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてをようように見付けて、尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて読売などにも筆とられなばとく多かるべ

し、又月々極めての収入なくば経済のことなどに心配多からんとて、是をもよくよく計らわんとす……」

そういう風に一葉女史を紅葉氏に紹介する筈になつていたのだが、右の絶交のために、一葉女史の方から紹介を断わり、又外のつてからも尾崎氏へ行くのは、半井氏に対して義理が悪い訳であつたのだから、そのままになつてしまつて、一葉女史は紅葉氏には逢わずにしまつたのであるが、此の時尾崎氏に逢つて居つたならば、一葉女史はもっと早く文名が出たろうと思われる。

下ノ一

更に又日記を参照すると、一葉女史は九月十五日に小説『うもれ木』を脱稿して、田辺龍子氏のもとまで持って行つた。これは、龍子氏の紹介で小さい本にしようという積りで本町三丁目の金港堂へ送ろうといふのであつた。此の小説は陶器画工の妹を主人公にしたものであるのだが、日記の二十四年の九月分あたりのところを見ると、花瓶の図様を書き留めたものがある。一葉女史の二番目の兄さん虎之助氏——が陶器画工であつたので、そ

れから聞いて書きとめたものに違いないと思うのだが、『うもれ木』のなかにはその図様及び焼きつけ方がすっかり使ってある。

同じ月の二十三日に甲州の『甲陽日報』というのへ小説を書いてやることにしたという記入がある。脱稿したのは二十四日頃らしい。これは『経机』なのであろう。十月二日のところに左の如くある。

「田辺君よりはがき来る。うもれ木一と先都ますの花にのせ度よし金港堂より申来りたるよし、原稿料は一葉二十五銭とのこと、違存ありや否やとなり、直ち

に承知の返事を出す」

日記には何も書いてないようであるが、大凡十月ちゅう位に小説をもう一つ書いたらしく思われる。これは二十六年になって『都の花』に出た『暁月夜』である。

十月から暮へかけて、金のことでひどく頭を悩ませて、原稿料のとどくのを鶴首して待っている有りさまが、日記の諸所で窺われる。殊に十二月二十七、八日あたりの、『暁月夜』の原稿料を受け取るあたりが甚だ面白い。其所の記述には後年の『濁り江』の材料になったかと思われる一節がある。それは稲葉こう子の貧居を訪うた記述

である。『濁り江』の源七佗住居のくだりと併せ読むべきものであるろう。

二十九、三十両日は「必死と著作に従事す」とあり、二十六年の一月二十日のところには「小説雪の日したため終る」とある。

一葉女史のその後の生活は所謂る生活難に対する悩みであつて、直接文学に関することは余り日記には表われ居らぬようである。

二十六年七月になつてからは、一葉女史の一家は小あきないを始めることに相談を決めて、十五日から家さが

しをやりだした。方々見て廻った末に、十七日に至つて、大音寺前——下谷区龍泉寺町三百六十八番地というのに家を見つけた。それは、日記によれば、間口二間、奥行六間ばかり造作はなかつたが、店は六畳で、五畳と三畳の座敷があり、敷金は三円で、家賃は月壺円五拾錢であつたといふのだが、今日の相場からいうと、全く嘘のような話である。場末であつたにしても、何しろ安いものであつたと云わなければなるまい。

樋口家の人々がその家へ引き移つたのは、同じ月の二十日である。龍泉寺町が吉原遊廓の裏手であることはこ

ここにいうまでもなからうと思うのだが、念の爲めにここに附記して置く。商ないでは荒物及び小児のおもちや、駄菓子というようなものであったので、一葉女史自身神田多町（たちよう）と読んで頂きたしへ買い出しに行つた。

日記のこの辺の記述によると、当時の細民の生活状態、物価等の一斑が窺い得られて如何にも面白い。

樋口家の人々は二十七年四月一杯まで龍泉寺町に住まっていたのであるが、その時分の作物は二十六年十一月頃に出来た『琴の音』——『文学界』への寄稿——と二

十七年の二月十八、十九日に四回分二十枚ばかり書いたという『花ごもり』——同上——だけであつたようだ、尤も此の『花ごもり』の原稿は龍泉寺町に居る間書き続けたらしく思われるのだが、それが何時のことだか、日記では分らない。

樋口家の人々の本郷丸山福山町四番地へ引き移つたのは、二十七年五月一日であつた。「家は本郷の丸山福山町とて、阿部邸の山にそいて、ささやかなる池の上にたてたるがありけり。守喜もりきといひしうなぎやの離れ座敷なりしとて、さのみ古くもあらず、家賃は月三円也、たか

けれどもこことさだむ」とある。六畳二間に四畳半があつて、池があり、庭があつて、月三円、それでも少し高いのであつたという時代なだから、当時の物価の大体は窺い得られようと思う。

此の家が一葉女史終焉の家である。しかし、家そのものは、明治四十三年の秋隣りの山の崖が崩れてこわれてしまったので、今は存在して居らぬ。

一葉女史が福山町へ越してから、最初に書いたのは、小説『やみ夜』らしい。これも『文学界』へ出たものであるが、書き始めは何時であつたのか、日記にはない。

唯七月十九日のところに「小説やみ夜の続稿いまだまともならず、編輯の期近づきぬれば心あわただし、此夜馬場孤蝶子のもとにふみつかわし、明日の編輯を明後日までこのばし給わらずやと頼む」とあるのみである。二十二日のところには「今朝やみ夜の続稿郵送」とある。

二十七年七月二十三日以後の日記がないのであるから、何時だか分らないが、とにかく十月頃に『おおつごもり』を書いたらしい。一葉女史の文体も考想もこの作で一転機を来たし、要するに、驚くべきほどうまくなったのであるが、これは次第に筆が熟してそうになって来た

のが主因であるには違いないのだが、一つは、その夏頃から一葉女史が西鶴の好色本などを可なり丁寧に読み始めたことは、それ等の文体等の変化に余程の影響があったことだと云ってもよからうと思う。

一葉女史の傑作『たけくらべ』が何時起稿されたものだが、日記が前記の通りないのだから、確なことは分らないのだが、二十七年の十一月か、十二月に起稿したには違いないのだ。あの作は人の知る通り、材を大音寺前あたりの子どもたちの生活に取ったもので、吉原の裏手という極めて特殊な場所の人生を描写した点に於て、記憶す

べきものがあるのだが、ああいうものを書いてみようという考は、大音寺前居住の時代にも起つたものとは推定し得られようと思わるるに拘らず、それに関することは日記のなかにもなければ何等の記録も樋口家には遺つて居ない。尤も、一葉女史は作に関する思いつきとか材料というようなものを手帳とか紙ぎれとかいうものに、心覚えに書きとめて置くというのではなかつたようであるのだから、『たけくらべ』に就ても日記のなかにそれに関して書いたところがない以上、外に記録がないのは敢て怪しむに足らざることである。但し、『たけくらべ』

のなかの或る章句などに就ては、その材料が大音寺前時代の日記のなかにあることは、誰でも気づくことであるうと思う。

唯、あの作の始めの方の三枚ばかりのところの下書きが樋口家に遺って居る。そのことに就ては、真筆版『たけくらべ』の末の方へ僕が書いて置いたが、題は『雛雞』というようになって居ったかと思う。文章はあの作の始めとそう違っては居らぬ。

『たけくらべ』は『文学界』の一月号位から十月か、十一月号位までで完結したと思つて居る。『文芸倶楽部』

へ出たのは、その翌年の一月頃である。

下ノ二

二十八年頃になつての一葉女史の作は『太陽』へ出た『ゆく雲』であるが、これに就ては日記のなかに何も記載はないけれども、三月頃に書いたものであらうと思ふ。

『濁り江』は同年の九月の『文芸倶楽部』へ出たのだが、日記六月十日のところに「小説著作に従事す、全篇十五

回七十五枚ばかりのもの作らんとす、いまだ筆おもうま
まに動かで……」とあるのだが、これは或は『濁り江』
になったのではなからうか。これは、福山町の一葉女史
の住居の近辺は銘酒屋の巢窟であつたので、そういう家
に居た女の一人をモデルにして、あのあたりの人間の生
活を描写したものである。

その次ぎの作は『十三夜』で、これと『やみ夜』——
此の方は二度の勤——とが、『文芸倶楽部』の『閨秀小
説号』へ出たのであつた。その時には、既に『濁り江』
で読書界の注意を可なり喚起して居つたので、『十三夜』

が出ると、一葉女史の名は可なり挙げたのだと思う。

二十八年じゅうでの作では、此の外に『軒もる月』

——四月頃の作か——と『うつせみ』——八月頃の作か

——とがあるのだが、『軒もる月』は、斎藤緑雨が読売に載せて居た『門三味線』を急に中止したので、一葉女史がそのあとを埋めるために大急ぎで徹夜で書いたものであつたと思う。『うつせみ』は、一葉女史の住居の隣りへ狂女が引越して来て、時々女史の家へなども飛び込んで来たそうであつたが、それからヒントを得て書いたものであつた。

一葉女史が博文館の通俗百科全書のなかの『女子書簡文』を書いたのは二十九年の始め頃であつたろうと思わ
るる。

日記の七月の十二日のところに「此ほど博文館の義捐
小説中に随筆ようなもの書けり、いとあわただしゅうて
みぐるしかりしか」とあるのだが、此の随筆ようなもの
というのは、全集の随筆中に入つて居る『ほととぎす』
であろう。三陸地方に大海嘯がおおつなみあつたので、その救恤の
ために、博文館が『文芸倶楽部』の義捐小説号なるもの
を出したのであつたように記憶して居る。同じ随筆の『そ

ぞろごと』は、二十八年の十月頃の作らしいのだが、これは『文学界』の連中で『うらわか草』とかいった特別号のようなものを出したので、それへ載ったのであった。

書き洩らしたが、『われから』は二十八年の十二月頃の作らしいのだが、これは『文芸倶楽部』へ出た。あの作は、島田三郎氏の最初の夫人——その夫人とは一葉女史は中島歌子氏のところと同門であった——のことからヒントを得たものであると思う。『わかれ道』も同じ頃の作である。これは翌年の『国民の友』へ出た。この作は『たけくらべ』と同じく材を大音寺前に得たものだ

と聞く。傘屋の小僧はその当時実在していたという話である。

斯ういう風で、二十九年へ入ってからは、一葉女史の筆を取ったのは、断片の『うらむらさき』と、前記の『女子書簡文』だけであったようである。

その年の四月頃から、一葉の病が進みはじめて、八月になってますます重くなり、遂に十一月二十三日になって遠逝してしまった。

丸山福山町へ引き移ってからの一葉女史の日記は『水の上日記』という名になって居る。家の前も後も池であ

ったので、それが為めに日記にそういう名をつけたのであった。この日記の二十七年の末あたりから終りへかけてが、実に面白い読み物である。僕の見るところでは、あの部分には、一葉女史の勘違いが随分多く表われて居るようであるのだが、人生記録としては、そういうところろが非常に面白いと思う。終りの方の齋藤緑雨との交渉なども如何にも面白い。

緑雨も一葉の死後あの日記を見るまでは、一葉女史によつてああいう風に緑雨自身が書かれて居ようとは思つて居らなかつたらしいのである。明治三十六年の秋頃、

一葉女史のあの日記を公にしようかという話が起って、その時は、齋藤が鷗外氏に主として相談したのであったが、その時嘗て『めざまし草』の連中へ一葉女史を加盟させようとする鷗外氏側の運動に対して緑雨がその裏へ廻って一々ぶちこわして居る経緯が日記では余りに明になって居るので、日記を鷗外氏に見せるのは少しきまりが悪いと、緑雨は苦笑して居た。

一葉女史の日記は、その後緑雨が預って居って、三十年の三月、医者から絶望状態であることを告げられると、僕を呼びに来て、僕が本所横網の緑雨の寓居へ駈け

つけると、緑雨は、自分の命が旦夕たんせきに迫って居ることを告げてから、樋口家へ返して呉れと云って、日記を僕に渡したのであった。

一葉女史が死んでからは、もう既に四十年もたって居る。緑雨が死んでからも三十年を少し越えて居る。考えてみれば可なり古いことだ。その後でも、文壇では可なり多くの人が死んで居る。僕などは、平凡無能のお蔭か、はたまたその崇りか、何うにか今まで生き延びて来た。気の利いた化物なら、もうとつくに引っ込む筈であるのだが、未だにまごまごして居るなどは汗顔の外はないの

だが、しかし、世のなかが新しくなったり、古くなったりするので、僕等のような立廻りのうすのろな者は引込みがつかなくなってしまうような気もするのである。

拙稿は、一葉女史の日記を使って、女史の実生活の方を示めたいのであったが、筆を取って見ると、それをやり出すと、なかなか四十枚や五十枚の原稿では何うにもなりそうもないので、その方は思い切って、こんなものを書いて、責を塞ぐことにした。

最後にいう、本稿の『中』に、一葉女史が『改進黨新聞』へ書いた小説を『たまだすき』として置いたが、これは

間違いで、『別れ霜』である。『たま櫛』は『武蔵野』へでも出たものではあるまいかと思う。

一葉女史のことを調べられる方は、全集中にある日記と、全集の末にある僕の跋と、それから真筆版『たけくらべ』の後について居る諸家の一葉観その他を一読されることを切望する。

日本文学電子図書館

明治時代の閨秀作家

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館